Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-08

クリエイティブ・クラスがもたらす社会変容に関する研究 : トロント都市圏を事例に

大川内, 晋

(Citation)
社会学雑誌,31/32:70-87

(Issue Date)
2016-10-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041378

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041378

クリエイティブ・クラスがもたらす社会変容に関する研究

――トロント都市圏を事例に――

大川内晋
神戸大学大学院人文学研究科博士課程

本稿は、グローバリゼーションの影響を受けて一九九〇年代半ばに登場する創造都市論を取り扱う。そのなかでも創造都市論の代表的な論者の一人であるリチャード・フロリダが提唱したクリエイティブ・クラスの理論（Florida 2002）を中心的に扱う。この理論が都市社会にいかなる影響を及ぼしたのかといった今まで先行研究ではあまり語られることのなかった関心を背景に、理論と都市社会の関係をマップ分析の比較を通じて検討する。そこではとりわけクリエイティブ・クラスの都市の選好条件として用いられた都市の「寛容性」に注目したい。理論と都市社会の関係を示すために、都市の「寛容性」を測定する指標の一つであるボヘミアン・インデックスにおいて、世界で最も高い数値を示した「寛容な都市」トロントをケーススタディとして、マップ分析を用いてその影響について検討する。そして、その検討を通じて現れるフロリダの「寛容性」の指標の実態を明らかにした上で、クリエイティブ・クラスの理論が抱える構造的問題と理論の射程を明らかにする。

一　はじめに

グローバリゼーションの影響を大いに受けて一九九〇年代に登場した創造都市論は、世界の様々な都市に都市政策として採用され[1]、近年の都市論において一つのブームを巻き起こした。その過程を振り返ると、創造都市論が実践に依拠しつつ展開していく中で、とりわけ中心的な人物が二名存在する。一人は創造都市の概念を初めて唱えたチャールズ・ランドリー、そしてもう一人がリチャード・フロリダである。

フロリダは、クリエイティブ・クラス[2]と呼ばれる都市の経済的成長を担う新たな階級を提唱した。また、アメリカ

において独自の指標を基にクリエイティブ・クラスの都市の選好の条件を探り、クリエイティブ・クラスが都市の経済成長を促すという理論[3]を展開してきた（Florida 2002）。それについては、現在までに批判も含めて実に様々な議論がなされてきた。二〇〇二年に出版された著書"*The Rise of the Creative Class*"（＝邦訳『クリエイティブ資本論―新たな経済界級の台頭』）（Florida 2002 ＝ 2008）はベストセラーとなり、クリエイティブ・クラスや独自の指標が一般人を含め多くの人に認知された。それと同時に、クリエイティブ・クラスの理論は視座、理論、定義、分析に至るまであらゆる批判を受けてきた。これらはひとえにクリエイティブ・クラスの理論に対する注目の高さを示していたといえるだろう。

しかし、たとえフロリダの主張が妥当であったにせよ、または多くの問題も抱えている不十分な理論に過ぎないにせよ、先行研究によればクリエイティブ・クラスが集積する都市の社会的変容については、今まで充分には語られることがなかった。本稿では、特にクリエイティブ・クラスが都市を選好する条件の一つとして用いられた都市の「寛容性」に注目する。都市政策を通じて理論が現実的に展開していく中で、都市社会とどのように結びついていったのかを検討する。

次は、創造都市論の文脈におけるフロリダの視座を先行研究によって明らかにし、以降で展開するクリエイティブ・クラスの理論と都市社会の関係に通ずる論点の立脚を目指す。

二　先行研究

先行研究によると、創造都市論が具体的に登場するのは一九九〇年代に入ってからであるが、創造都市が登場する契機は一九七〇年代以降の都市社会の変容が深く関係している。それは、一九七〇年代に発生した二度のオイルショックを最大の契機とする都市の再編成を出発点に、その後、世界都市（Friedmann 1986）やグローバル・シティ（Sassen 1991）の概念に代表されるポスト・フォーディズムやグローバリゼーションの流れを受けて都市社会が変容していく過程に見て取ることができる。創造都市は、この社会変容の中で都市社会が直面する諸問題に取り組むために生み出された概念である（Landry and Bianchini 1995; 佐々木一九九七）。

創造都市論の展開をみると、佐々木が定義した「人間の活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市」（佐々木二〇〇一：40-41）のように一定の包括的な定義は存在するものの、それぞれの論者によって概念が異なっており、また、対象とされた都市の

性質が異なるため、明確に統一された定義が存在しない（Florida 2002; Landry and Bianchini 1995; Landry 2000; 佐々木 2001 など）。

しかしながら、先行研究によると、ランドリーらによって展開されてきた創造都市論と、フロリダのクリエイティブ・クラスの理論には決定的な差異がある。例えば、都市の危機にいかに取り組むべきかという視座からの展開（Landry and Bianchini 1995）や、中規模の都市を対象としてグローバル・シティがもたらす秩序から脱却することを目指すあり方（佐々木　一九九七）は、フロリダの分析と対極にあるといえるだろう。フロリダ以外の創造都市論者の多くは、創造都市論が展開する一九九〇年代以前の社会の変容がもたらした金融資本主義の不安定性、産業の構造転換に伴う都市の衰退、インナーシティが抱える諸問題、ジェントリフィケーションによる排除の問題、新自由主義による経済的格差の拡大や社会的連帯の消失などに代表される都市の危機を乗り越えるためのコンセプトとして創造都市論を展開してきた。

その一方で、フロリダは幼少期から工業化した都市の衰退を間近で見つつも（Florida 2002）、衰退した都市がいかにして再生するのかではなく、今後どのような都市が成長するかということを、先進国を中心とした知的集約型産業への構造転換、イノベーション型産業の成長、文化芸術に対する市場の拡大やグローバリゼーションによる流動性の高まりなどといった社会の状況を捉えつつ、クリエイティブ・クラスの分析によって明らかにしてきた。この決定的に異なる研究の方向性から、フロリダとフロリダ以外の論者とを二つに大別できるのではないだろうか。ここでの問題は、フロリダのクリエイティブ・クラスの理論には都市がすでに抱えていた個別の危機に対する危惧が欠落していたことである[1]。このことは、その後クリエイティブ・クラスの理論が都市政策として用いられる中で、衰退した都市を再生するためやグローバリゼーションによる様々な脅威から都市が逃れるためというよりは、クリエイティブ・クラスを集積させてグローバルな都市間競争に勝利することを前提としているように見て取れるのである。

それは笹島（二〇一二）が指摘したように、創造都市が新自由主義的な企業家主義的都市経営として用いられているといえるだろう。つまり、クリエイティブ・クラスの理論が今日の社会が抱える社会的不平等や経済的格差の問題を乗り越えるのではなく、むしろ更に拡大させる可能性を持っていることを暗示している。

クリエイティブ・クラスの理論に対する以上の論点について、次では「寛容な都市」トロントをケーススタディに検討していく。

三　トロントのケーススタディ

三―一　都市の概要

はじめにトロントの都市としての概要を説明する。トロントはカナダにおいて経済の中心地で、北米ではニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴに続く第四位の経済規模を有し、人口規模では五位に位置する。二〇一一年において、トロントはカナダ全体のGDPのうち一一％を構成しており、一四四〇億ドルの経済規模を誇る。

トロントの労働勢力をみてみると、トロント都市圏（CMA＝Census Metropolitan Area）には二〇一一年において三二〇万人の労働人口が存在している。産業別に分類すると最も多いのがビジネス、金融、管理業従事者で、全体の二二％を占めている。[5] このころからもわかるようにトロントは金融業が中心的な産業である。トロントは北米における金融の中心地の一つで、金融サービス部門ではニューヨーク、ロサンゼルスに続く北米第三位の規模をもち、同時にその高い安定性でも知られている。労働者全体に対する金融やビジネスサービス関係に従事する労働者の割合が二七・八％と非常に高く、一方で製造業に従事する人々の割合が労働者全体に対して六・一％と非常に低い。この傾向からニューヨーク、ロンドン、パリ、サンフランシスコなどのようにグローバル・シティに顕著な脱生産的な産業構造を持つ都市であることがわかる。

また、トロントは文化多様性に富んだ都市でもあり、人の流入や流出が激しい他のグローバル・シティと比べても実に多様な市民によって構成されている都市である。[6] トロントでは、市民のうちのほぼ半数が国外からの移住者であることが明らかとなっている（City of Toronto 2006）。それに伴い、市民が使用する言語も多様で四〇以上の言語が使用されている。つまり、トロントは金融業を中心とした巨大な経済規模をもつと同時に、文化性に富んだ都市であるといえるだろう。

三―二　創造都市政策

そのトロントでは、一九九八年より文化戦略の一環として創造都市政策を施行している（City of Toronto 2001）。その背景として、トロントは創造都市に適した社会的・経済的環境が整っていることが明らかになっている。[7] それを活かしてトロントが創造都市政策を施行する上で主に強みとしている点をまとめると以下の五つである。[8]

一、労働勢力全体の二倍以上を誇るクリエイティブ産業[9]及び文化産業の成長

二、市民の構成においてその約半数が海外出生という文化多様性[10]

三、高等教育機関の充実や大学卒業もしくは同等レベル

の教育を受けた市民の割合の高さ[12]

四、文化施設の充実[13]

五、文化への公的支援に対する市民の理解度の高さ[14]

これらの強みは確かに創造都市を構成する要素ではあるといえるが、では、トロントは創造都市政策を通じて一体どのような都市を目指しているのだろうか。その答えは、ずばり真のグローバル・シティではないだろうか。[15]

三―三　マップ分析

トロントにおける創造都市政策をみると、クリエイティブ・クラスの理論による影響があることは明らかである。そこで理論と現実を結びつけるためにマップ分析へと移る。

トロントでは、フロリダが在籍するマーティン・プロスペリティー・インスティテュート（Martin Prosperity Institute 以下MPI）によってクリエイティブ・クラスの職場[16]及び居住[17]に関する調査が進められてきた（Martin Prosperity Institute 2010, 2011）。そのマップ分析をトロント市等が調査したトロントの移民や貧困に関するいくつかのマップ分析を組み合わせて比較分析を行う。比較したのは、一、移民と低所得者[18]の分布、二、移民の分布と地価の関係、三、移民とクリエイティブ・クラスの居住及び職場の分布、四、クリエイティブ・クラスとアーティストの分布、の四項目である。

まず、一：移民と低所得者の分布については、マップを通じて移民と低所得者の分布の傾向からその関係性を探ることを試みた。ここで使用したマップは図1[19]、及び図2[20]である。

図1は二〇〇六年のカナダ統計局の調査に基づき、トロント市が作成したものである（City of Toronto 2007）。トロント市の地域ごとの全人口に対する移民の割合を示しており、〇～二五％、二六～四〇％、四一～五三％、五四～六四％、六五～八〇％の五段階に分かれており、色が濃くなるに連れて、その割合が高いことを示している。

また、図2はライナー・クラウスら（2011）によって調査されたトロント市の各地域における低所得者層の割合を示した図である。こちらも同じく五段階評価に分かれており、〇～一〇・六％、一〇・七～一五・二％、一五・三～一九・七％、一九・八～二五・九％、二六～六一・九％まで割合が高くなるに連れて色が濃くなる。ここでの低所得者層の定義は、カナダ統計局（Statistics Canada）が規定する低所得カット・オフ（LICO：Low Income Cut-Off）に基づいて評価されている。このマップデータを照らしあわせてみると、移民が比較的多く居住する地域と低所得者が多く居住する地域が重なっていることがわかる。[21]

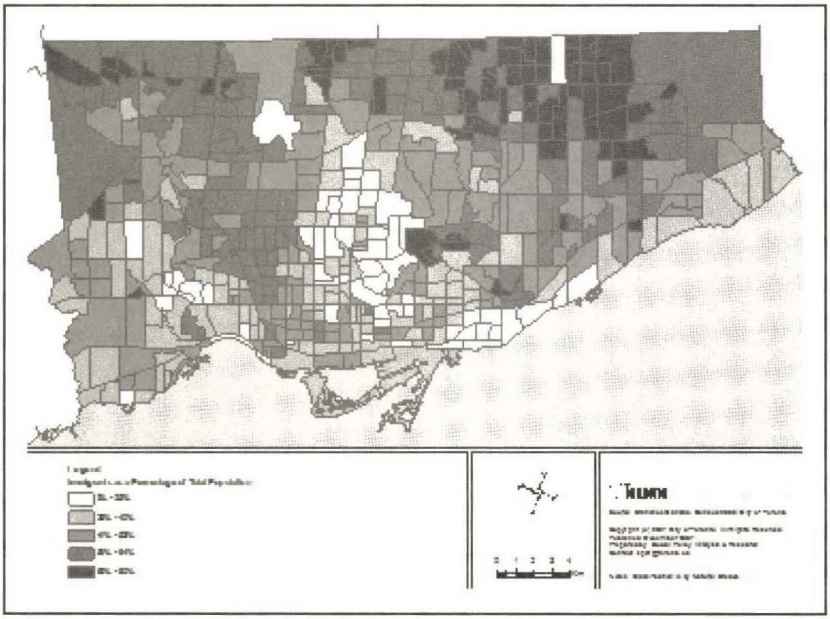

図１　トロント市内の各地域における全人口に対する移民の割合

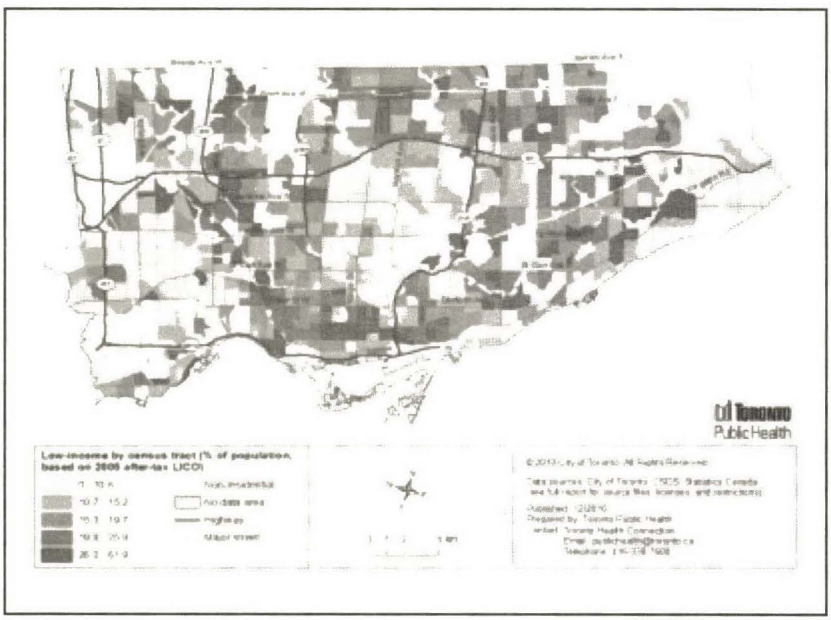

図２　トロント市内の地域別低所得者の割合

次に、二：移民の分布と地価の関係についてマップを用いて比較する。移民の分布を示した図1に加え、トロント各地域の地下水準を示した図3を用いる。図3はトロント・スター新聞社の調査によって明らかにされた二〇〇八年におけるトロント市内の各地域における地価に対する適正評価である。これによって、おおまかに各地域の地価を判断する事ができる。図3によると、地価の評価が高いのはダウンタウン周辺と、ダウンタウンから北にTTC（Toronto Transit Commission）高速鉄道網に沿った周辺地域であることがわかる。そして、ダウンタウン以外はおおよそ地価が低い。

この傾向を図1と比較すると移民は比較的北側の郊外地域に居住する傾向にあり、地価が高い中心部では移民の割合が低いことがいえる。加えて図2と比較する限りでは、中心部では低所得者の割合が低いことから、移民は全体的に貧しく、都市郊外地域に居住しながら生活する傾向にあるといえる。

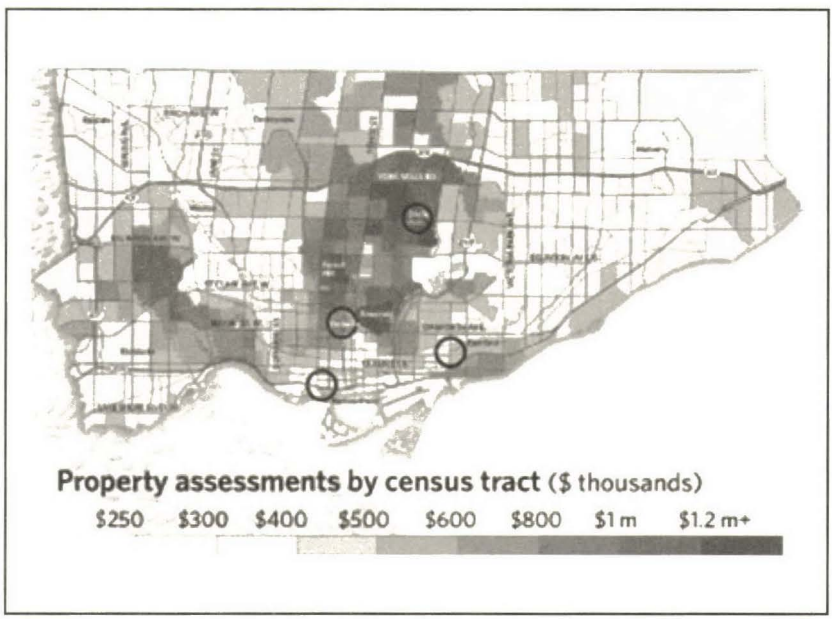

図3　トロント市内各地域の地価水準

さて、続いては三：移民とクリエイティブ・クラスの居住及び職場の分布に移る。ここでは前節で示したトロントにおける移民の居住の傾向と、図4[23]及び図5[24]を比較する。図4、5はそれぞれMPIによって調査されたトロント市における職業階級別の居住地と職場を示したマップデータである（Martin Prosperity Institute, 2010）。その地域における支配的な職業階層をクリエイティブ・クラス、サービス・クラス[25]及びワーキング・クラス[26]の三つに分類している。色の濃い方からサービス・クラス、クリエイティブ・クラス、ワーキング・クラスに分類されている。また、クリエイティブ・クラスとサービス・クラスの居住地もしくは職場を左上がりの斜線で、ワーキング・クラスとサービス・クラスのそれを右上がりの斜線で示している。

これによると、クリエイティブ・クラス、サービス・クラス、ワーキング・クラスのほとんどが職住近接の傾向にあることがわかる。それによってクリエイティブ・クラスとその他の職業階級（主にサービス・クラス）との居住地及び職場に明確な結果が生じていることが明らかとなっている。それは、クリエイティブ・クラスがはっきりとTTC（Toronto Transit Commission）高速鉄道網に沿って、都市中心部に職場を持ちながらその近郊に居住しているのに対し、一方サービス・クラスはそれ以外の地域に居住し働いていることである。

これを図1と比較すると、移民の多くは、サービス・クラスが居住し働く地域に居住していることが明らかとなる。つまり、移民の多くはクリエイティブ・クラスではなく、ほとんどサービス・クラスである可能性が高いといえる。

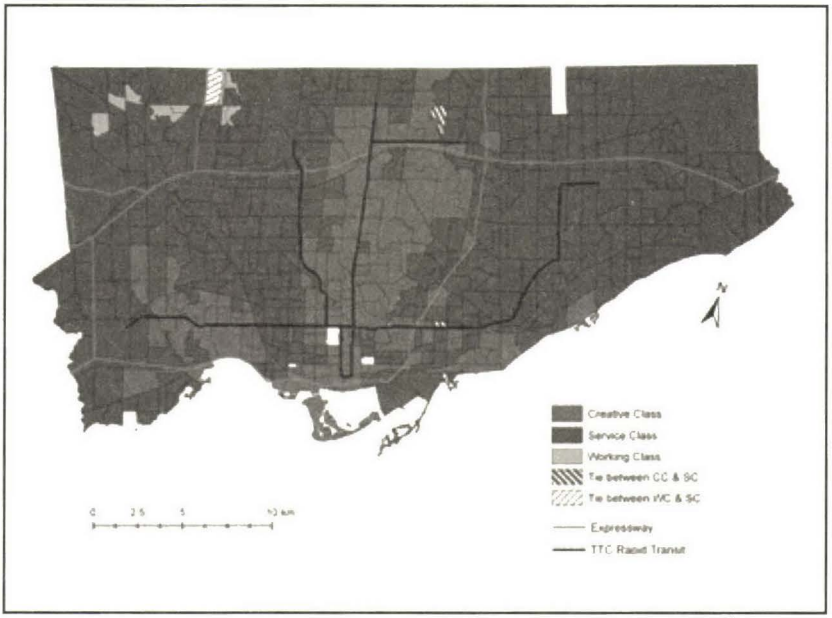

図４　トロント市内各地域の支配的な職業階層の職場の分布

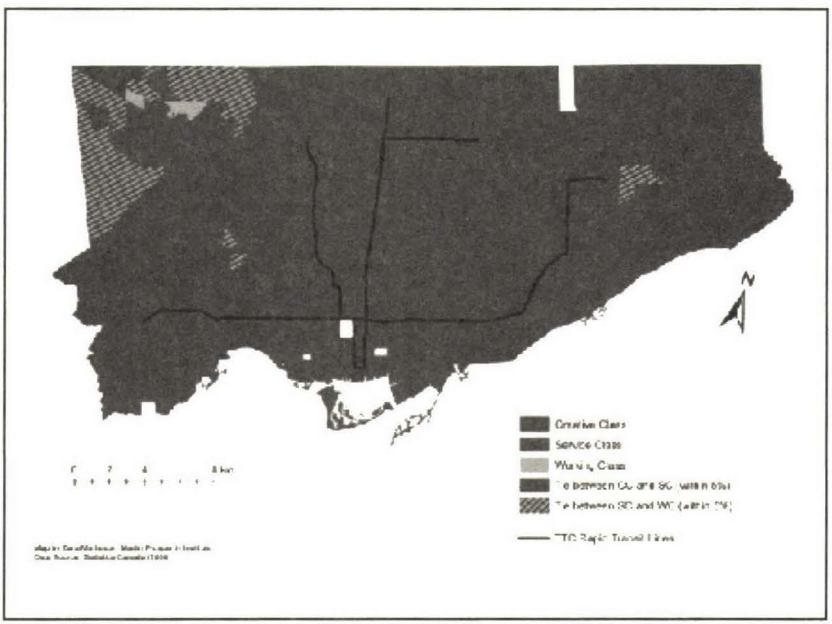

図５　トロント市内各地域の支配的な職業階層の居住地の分布

最後に、四：クリエイティブ・クラスとアーティストの分布を比較する。クリエイティブ・クラスの定義によると、アーティストはクリエイティブ・クラスに包括される職業分類である。しかし、クリエイティブ・クラスはクリエイティブ・プロフェッショナルとスーパー・クリエイティブ・コアに分類されるため、クリエイティブ・クラス全体とアーティストではいくらかその居住や職場のための場所の選択にいくらか異なる結果が生じても不自然ではない。それは、例えばジェントリフィケーションの視点を持つならば、スーパー・クリエイティブ・コアはクリエイティブ・プロフェッショナルによってジェントリフィケートされるのではないかといったことも考えられるからだ。

そこで、MPIによるマップデータからその違いを明らかにするために図4及び図5と、MPIによってトロント市内のアーティストの居住地及び職場について調査されて作成されたマップ[27]を比較する。そのマップは点で示されており、一つの点につき、一二人のアーティスト[28]の居住地か職場、もしくは職場と居住地を兼ねた場所が存在していることを指し示している。しかし、本稿ではそのマップの表現の性質上、割愛する[29]。

マップを比較してわかることとしては、まずトロントのダウンタウンにはどちらも一定の集積がみえるものの、アーティストの職場及び居住地はクリエイティブ・クラスのそれ以上にダウンタウン周辺に集積しているようにみえる。

また、南北に連なるTTC高速鉄道網の路線沿いにおける集積をみると、クリエイティブ・クラスに比べてアーティストの集積が見られない。このことからもアーティストはクリエイティブ・クラスの中でもよりダウンタウン周辺に集積する傾向があるといえるだろう。

さらに、アーティストを他のマップデータと比較すると、図2との比較から低所得者が居住する割合が高い地域とアーティストの居住地が重なっていることがわかる。また、図3のマップデータとの比較によって、ダウンタウン周辺でありながらも、地価が比較的低い地域にアーティストの集積がいくらかみられる。これは、クリエイティブ・クラス全体にはあまり見られないアーティストに特殊な傾向である。

これらのマップの比較分析の結果、次のことが明らかとなった。一、移民が比較的多く居住する地域と低所得者が多く居住する地域が重なっていること、二、移民は比較的地価が低い北側の郊外地域に居住する傾向[30]にあり、地価が高い中心部では移民の割合が低いこと、三、それらを組み合わせて分析すると、移民は全体的に貧しく、都市郊外地域に居住しながら生活しているのではないかということ、四、移民の多くがサービス・クラスが居住し働く地域に居住していることから、移民の多くはクリエイティブ・クラ

スではなく、ほとんどサービス・クラスである可能性が高いこと[31]、五、アーティスト多くがクリエイティブ・クラス全体の中でも特にダウンタウンに居住及び職場を持つ傾向が強いこと、六、さらにアーティストはダウンタウン周辺のクリエイティブ・クラスが居住していない、低所得者層の割合が比較的高い地域にも居住していること。

つまり、クリエイティブ・クラスが居住し、且つ働いているのは、移民の割合が低く、地価が高く、低所得者の割合が低い地域である。また、移民の多い地域はサービス・クラスが多く低所得者層の割合が高い（Martin Prosperity Institute 2011）。

四　考察 ―「寛容性」の指標の実態

マップ分析に基づいた考察に入るうえで、ここで改めて「寛容性」に注目したい。なぜならばマップ分析の限りでは、創造都市政策を施行してきたトロントには「寛容」とは言い難い社会が広がっているからである[32]。

では、いったいフロリダの「寛容性」とは何であろうか？それは分析の指標をみる限り明らかである。寛容性の指標のうち、ゲイ・インデックス、メルティング・ポット・インデックスはそれぞれセクシャル・マイノリティ、移民マイノリティの割合を示している。つまり、フロリダの「寛容性」とはマイノリティに対する寛容的な態度を指している。確かに移民マイノリティが市民の人口構成の半数を司るトロントは「寛容」な都市であろう。

しかし、これは都市の「寛容性」を構成する移民マイノリティの多くが低所得者層やサービス・クラスの割合が高い地域に居住しながら、そのつまりはクリエイティブ・クラスにとっての都市の選考条件を満たし続けているに他ならないという事実を無視しているとはいえないだろうか？フロリダの分析はこの点を全く考慮しておらず、都市政策において「寛容性」は好意的な意味合いで用いられてきた。「寛容性」を担保するマイノリティは、一見すると文化多様性を生み出してはいるが、同時に都市社会における社会的不平等や経済的格差の大きな影響を被っている。クリエイティブ・クラスがサービス・クラスに支えられて経済活動を行い、「寛容性」を都市の選考条件とする限りにおいて、クリエイティブ・クラスの理論はこの関係性を再生産する道具となる。ここにクリエイティブ・クラスの理論の限界を指摘できる。

この理論が都市政策として用いられてきた経緯に注目してみると、グローバルに人材を集め、経済的競争力を重視するグローバル・シティのような一部の都市に都合の良い理論ではないだろうか？それは、グローバル・シティ内部の比較的大きな社会的・経済的格差を、「寛容性」という

言葉がうまくオブラートに包んでくれるような働きをすると考えることもできるからである。このことから、クリエイティブ・クラスの理論の射程は、都市経済の成長のために社会的不平等や経済的格差といった諸問題を抱えつつ、何よりも経済的な「寛容性」を重視する新自由主義的なグローバル・シティにあるだろう。

五　結論

本稿では、フロリダのクリエイティブ・クラスの理論が、二〇〇〇年代に都市政策に採用されていく過程を通じ、現実の社会とどのように結びついていったのかについて、トロントをケーススタディに明らかにしてきた。その際の本稿における仮説は、クリエイティブ・クラスの理論やトロントの創造都市政策が、「寛容性」や「多様性」を強調しながらも、実際には社会的排除を増大させて、社会的不平等や経済的格差を拡大させていったのではないかというものであった。その検討の結果、クリエイティブ・クラスがどの程度社会的排除を生み出しているのかについて定量的な分析に基づいた帰結をもたらすことはできないものの、クリエイティブ・クラスの理論の構造が抱える問題や、「寛容性」の概念の限界性を明らかにしてきた。

ただし、近年フロリダは都市内部で拡大しつつあるグローバルな格差を危惧する記述をしている（Florida 2012: 368）[33]。フロリダが、社会的包摂を意図する言及をしたのはこれが初めてであったが、見方によっては、フロリダが言及せざるをえないほどの状況が、二〇〇〇年代の社会変容を通じて起きているといえるのかもしれない。

結論としては都市におけるグローバルな格差の問題に取り組むために、フロリダのクリエイティブ・クラスの理論の限界性を踏まえてそこから脱却しなければならないだろう。それには権力構造を内在する「寛容性」の概念を超えて、つまり社会的地位や経済的状況の差異を踏まえた上で新たな相互関係の構築に寄与するような概念を築いていく必要があるだろう。

註

（1）ランドリー（2000）によると、現在（当時）一〇〇あまりの都市が創造都市の実践に取り組んでいる。

（2）クリエイティブ・クラスとは新しい発想、技術、作品を経済機能として持つ、科学、エンジニアリング、建築、デザイン、教育、芸術、音楽、娯楽に関わる職業に従事する人々と定義されている（Florida 2002）。クリエイティブ・クラスは、より中心的な特性をもち、よりクリエイティブな仕事をするスーパー・クリエイティブ・コア（主に科学者、技術者、大学教授、詩人、小説家、芸術家、エンターテイナー、俳優、デザイナー、建築家など）と、いわゆる知的集約型産業従事者であるクリエイティブ・プロフェッショナル（ハイテク、金融、法律、医療、企業経営など）に分類される。

（3）フロリダは、クリエイティブ・クラスが集積する都市は経済的に成長するという見解から、独自の指標をもとにクリエイティブ・クラスの都市の選好の条件を分析した。それが、いわゆる3Tと呼ばれる指標である。3Tとは、Technique（技術）、Talent（才能）、Tolerance（寛容性）の三つの頭文字をとったもので、これらが都市の経済成長の要因だとして、クリエイティブ・インデックスと独自の指数を作成し都市を分析した。クリエイティビティ・インデックスは、四つに分類することができる。一つは労働力におけるクリエイティブ・クラスの人口比率、次に一人当たりの特許件数で測るイノベーションの量、さらにミルケン研究所によるハイテク都市指数、そして、都市におけるゲイの集積度を示すゲイ・インデックス、市人口における移民の割合を示すメルティングポット・インデックスや芸術家（作家、デザイナー、ミュージシャン、俳優、映画監督、画家、彫刻家、写真家、ダンサー）と人口の比率を示したボヘミアン・インデックスである。これらの指数を用いて、一九九〇年代のアメリカにおいて、ボヘミアン・インデックス、メルティングポット・インデックス、CDI（メルティングポット・インデックス、ボヘミアン・インデックス、ゲイ・インデックスを合成した合成多様性指数）の三つの指数と地域人口増加、ボヘミアン・インデックスと雇用増加、ボヘミアン・インデックス及びCDIと大都市における人口増加及び雇用増加メルティングポット・インデックスと中小都市の人口増加のそれぞれにおいて相関関係があることを明らかにした（Florida 2002）。

（4）他にもクリエイティブ・クラスの理論は多くの批判を受けてきた。代表的な批判としては、クリエイティブ・クラスの概念の定義自体が曖昧かつ不十分であり、クリエイティブ・クラスに含まれる職業が本当に創造的であるのかどうか疑わしいことや、（Peck 2005; Markusen 2006）、クリエイティブ・クラスの集積と都市の経済的成長の因果関係の怪しさ、恣意的に指標が作成され用いられているのではないかという疑い（Peck 2005）、クリエイティブ・クラスのアイデアは全く新しいものではなく、ただハイテク産業が急激に伸び、流通市場が再生したに過ぎない（Pratt 2008）、他には、ハーヴェイの提唱する企業家主義的都市（Harvey 1989）を理論フレームに置きながら、フロリダが主張する創造都市戦略は新自由主義的な都市経営の中で用いられた戦略の一つにすぎないという批判（Peck 2005; Pratt 2008）、さらにそれが、先進国を中心とした脱工業化とクリエイティブ・クラスの職業と密接に結びつく新たな産業の勃興と結

びついた現象だという指摘（Scott 2006）、他、創造都市の3Tに基づく指標による都市のランキングがグローバルな都市間競争を助長するのではないかという指摘もある（Peck 2005）。

（5）他、小売業及びサービス業従事者二二％、貿易、運輸、オペーレーター業務従事者一二％、経営業一〇％、科学産業従事者九％、社会科学、教育、政治及び宗教関係の職業従事者九％、その他健康関係六％、製造業五％、文化芸術、娯楽産業及びスポーツ従事者五％、第一次産業従事者一％。

（6）トロントが四八％であるのに対して、例えば、ニューヨークが三六％、ロサンゼルスが四一％、シカゴが二一・七％。

（7）詳しくは以下を参照のこと。AuthentiCity 2008; City Council、Toronto Culture 2003; City of Toronto 2001、2006、2007; City of Toronto Economic Development Committee and Toronto City Council 2011; City of Toronto Social Development Finance and Administration Division 2006; City Council、Toronto Culture 2003; Meric 2006; Martin Prosperity Institute 2011.

（8）詳しくは以下を参照（AuthentiCity 2008; City of Toronto 2001; City of Toronto Economic Development Committee and Toronto City Council 2011; Martin Prosperity Institute 2011; Meric 2006）

（9）クリエイティブ産業の労働勢力は、一九九一年から二〇〇七年の間に五・四％を示しており、産業全体の平均が二・二％であるのに対して三・二％も高く二倍以上の成長率を示していた（Martin Prosperity Institute 2011）他、トロント大都市圏でみると、クリエイティブ・クラスは九八〇、六五五人ほど存在し（クリエイティブ・コア三九九、六八〇人、クリエイティブ・プロフェッショナル五〇、九七五人）でそれぞれ労働勢力全体の三八・二％（一五・六％、二二・七％）を占めている（AuthentiCity 2008）。

（10）クリエイティブ産業の定義については、ここではImagine a Toronto… Strategies for a Creative City（Meric 2006）の中で定義された三六の職業を示している。

（11）文化多様性の観点から世界中から技術、経験、ソーシャル・ネットワーク、都市の芸術が持つ伝統が人の移住とともにもたらされ、他文化との相互依存関係によって、新たな展開が生み出され、創造的な人材を生み出すのに不可欠な要素となるとの指摘がある（Meric 2006）。

（12）オンタリオ芸術デザイン大学他多数の大学がヴィジュアルアーツ、パフォーミングアーツ、建築、広告デザイン、ファッションやメディアといった分野に七〇〇〇人を超える人材を輩出している（Meric 2006）。このことから急成長しているクリエイティブ産業に従事する人材の育成にも力を入れていることが見て取れる。また、トロントは産業化した国々による比較において、大学卒業レベルの高等教育を受けた市民の割合が高く、二〇〇一年のトロント都市圏では、一五歳以上の五五％以上が、二〇歳以上の市民の五二％が大学卒業もしくはそれと同等の教育を受けていることが明らかとなっている（AuthentiCity 2008; City of Toronto Economic Development Committee and Toronto City Council 2011）。

（13）トロント国際映画祭をはじめ七〇以上の映画祭が開催されており、二〇〇〇以上の芸術団体が存在する。

（14）オンタリオ州の納税者向けにアートへの投資の公的支援に対す

る市民の理解を調査したアンケート（City of Toronto、2011）によると、八一％がアートにお金を使うことに賛成し、九五％がアートは生活の質を向上させると回答、八九％はアートが生活からなくなれば価値が下がるとし、八一％はアートが生活の質に重要、九五％はカナダ人アーティストの成功が市民にプライドを与える、八一％は公的資金による支援に賛成、八〇％のトロント人は政府の公的空間のアートへの投資が地域経済を向上させると回答した。

(15) トロントの行政は、トロントが未だにグローバル・シティには達していないものの、北米でニューヨーク、ロサンゼルスに続く経済規模を誇り、今後グローバル・シティになる可能性を大いに秘めた都市であると評価している。

(16) 出典：Martin Prosperity Institute. 2010. The Geography of Toronto's service and What it means for the city of Toronto. Martin Prosperity Institute. Exhibit 5. Dominant Class Place of Work.

(17) 出典：Creative Class 1Group（http://www.theatlanticcities.com/jobs-and-economy/2012/08/divided-global-city/2270/）

(18) 低所得者層の定義については、カナダが規定する貧困の定義が存在しないために、政府や官庁は一世帯、家族、個人の経済的需要を反映するための収入と支出に基づいた評価を利用している。しかし、本稿で引用するトロントの貧困に関する文献（Rinner, Claus.;Dianne. Patychuk,;Suzanne. Briggs. 2011. Final Project Report and Map Series, behalf and with the support of Toronto Public Health.）ではカナダ統計局（Statistics Canada）が規定する低所得カット・オフ（LICO; Low Income Cut-Off）及び、低所得評価（Low Income Measure）に基づいて低所得者層が定義されている。それによると、ＬＩＣＯは収入と家族の支出に基づいて算出されている。カナダ統計局は、おおまかな所得をカナダの家族の衣食住に対する平均的な費用にその二〇％を上げた数値によって算出されている。また、ＬＩＭは家族の大きなと子供の数に合わせた、おおまかな収入の中央値の、さらにその半分の値に基づいて算出されている。

(19) 出典：(City of Toronto 2007)

(20) 出典：(Rinner, Claus.;Dianne. Patychuk, Suzanne. Briggs 2011)

(21) 実際に、トロント市の調査によって、二〇〇六年の時点で低所得者層全体のうちの五〇％以上が移民によって構成されていることが明らかとなっている(City of Toronto、Social Development Finance and Administration Division, 2011).

(22) 出典：(Toronto Star 取得日時：二〇一三年九月一二日)

(23) 出典：(Martin Prosperity Institute 2010)

(24) 出典：(Creative Class Group 取得日時：二〇一三年九月一二日)

(25) マーティン・プロスペリティー・インスティテュートによると、サービス・クラス（The service class; routine-oriented service occupations）の定義とは、飲食サービス業従事者、用務員、公園管理人、秘書、事務員などのサービス部門によって構成されているクリエイティブ・クラスよりも自主性の低い職業を指す。（Martin Prosperity Institute -Understanding our Terminology 取得日時：二〇一三年九月一二日（http//martinprosperity.org/about/understanding-our-terminology/））.

(26) マーティン・プロスペリティー・インスティテュートによるワーキング・クラスの定義は、サービス・クラス、建設業、メカニッ

ク、クレーン作業者、組立ライン作業員といった身体的スキル（physical skill）を用いて、同じタスクを繰り返す種類の労働に従事する人を指している。肉体的な労働によって物質的な商品を生産して賃金を得ているために、労働するために必要な正規の教育の要求度は低い。また、マーティン・プロスペリティー・インスティテュートによるワーキング・クラスの特性に対する特徴的な分析としては、余暇を過ごす際に、椅子に座って仕事が多い傾向にあるクリエイティブ・クラスが、何らかの活動をして過ごすのに対して、ワーキング・クラスはくつろいで過ごす傾向にあると指摘している（Martin Prosperity Institute -Understanding our Terminology 取得日時：二〇一三年一月二九日（http://martinprosperity.org/about/understanding-our-terminology/））.

(27) 出典：（Martin Prosperity Institute 2011）

(28) ここでのアーティストの定義については、俳優及びコメディアン、職人及び技術者、作家（Author and Writer）、指揮者、作曲家及び編曲家、ダンサー、ミュージシャン及び歌手、その他パフォーマー、画家、彫刻家及びヴィジュアルアーティスト、プロデューサー、ディレクター、振付師及び関連の職業の九つの分類に基づく（Martin Prosperity Institute 2011）。

(29) アーティストの職場と居住地及び職場兼居住地が細かな点で示されているために、モノクロでは視認することが困難であり、詳しくは引用先（Martin Prosperity Institute 2011）を参照のこと。

(30) 地価の評価が高いのはダウンタウン周辺（図5）と、ダウンタウンから北にTTC（Toronto Transit Commission）高速鉄道網に沿った周辺地域でそれ以外はおおよそ地価が低い。

(31) クリエイティブ・クラスがはっきりとTTC（Toronto Transit Commission）高速鉄道網に沿って、都市中心部に職場を持ちながらその近郊に居住しているのに対し、一方サービス・クラスはそれ以外の地域に居住し働いている。

(32) 無論、トロントの創造都市政策がクリエイティブ・クラスの理論のみに基づいて施行されてきたものではないし、むしろ一九九八年より施行されてきたトロントの創造都市政策は、フロリダ（二〇〇二）によるクリエイティブ・クラスの提唱よりも早い段階から開始されている。また、クリエイティブ・クラスという分類ではなくクリエイティブ・オキュペーションと定義してトロントのクリエイティブ産業従事者を分類している点をみると、一定の距離を置いて創造都市政策を進めてきたと考えられなくもない（AuthentiCity 2008）。しかしながら、マップ分析の比較によって明らかとなった結果は、多様性やクリエイティブ産業や文化産業の成長を強みにグローバル・シティを目指すトロントの創造都市政策が社会的排除の関係性を全く無視出来るものではないことを表している。

(33) 都市内部で拡大する格差に対して、創造都市（または過去の偉大な都市）のように、都市住民に平等で、かつ多様なあらゆるものへのアクセスを保証し、究極的にはすべての労働者と市民の創造性を結びつけて、価値ある新たな社会集団を形成することが必要だと述べている。

参考文献

AuthentiCity. 2008. *Creative City Planning Framework*. AuthentiCity for the City of Toronto.

City of Toronto. 2001. *The Creative City: A Workprint* City of Toronto. Culture Division.

——.2006. *Census Backgrounder on Language. Citizenship. Immigration and Mobility*. City of Toronto.

——.2007. *Statistics Canada. Census 2006*. City of Toronto.

City of Toronto, City Planning Division. 2010. *Toronto Official Plan*. City of Toronto.

City of Toronto Economic Development Committee and Toronto City Council. 2011. *Creative Capital Gain*. City of Toronto Economic Development Committee and Toronto City Council.

City of Toronto, Social Development Finance and Administration Division. 2006. *THE NEW IMMIGRANTS IN TORONTO*. City of Toronto Social Development Finance and Administration Division.

——.2011. *Profile of Low Income in the City of Toronto*. City of Toronto Social Development Finance and Administration Division.

City Council, Toronto Culture. 2003. *Culture Plan for the Creative City*. City Council.Toronto Culture.

Creative Class Group (http://www.creativeclass.com/).（取得日時：二〇一三年九月一一日）

Florida, Richard. 2002. *The Rise of the Creative class*. New York: Basic Books.（＝二〇〇八、井口典夫訳、『クリエイティブ資本論—新たな経済界級の台頭』ダイヤモンド社。）

——.2005. *The Flight of the Creative Class: The New Global Competition for Talent HarperBusiness*.（＝二〇〇七、井口典夫訳、『クリエイティブ・クラスの世紀—新時代の国。都市。人材の条件』ダイヤモンド社。）

——.2008. *Who's Your City?: How the Creative Economy Is Making Where to Live the Most Important Decision of Your Life*. Basic Books.（＝二〇〇九、井口典夫訳、『クリエイティブ都市論—創造性は居心地のよい場所を求める』ダイヤモンド社。）

——.2010. *The Great Reset: How New Ways of Living and Working Drive Post-Crash Prosperity*.Harper.（＝二〇一一、仙名紀訳、『グレート・リセット 新しい経済と社会は大不況から生まれる』早川書房。）

——.2012. *The Rise of the Creative Class-Revisited: 10th Anniversary Edition-Revised and Expanded*. New York: Basic Books a member of the Perseus Books Group.

Friedmann, John. 1986,"The World City Hypothesis", *Development and Change 17(1),pp.69-83*.

Gertler, Meric. 2006. *Imagine a Toronto…Strategies for a Creative City*.magineatoronto.ca.

Harvey, David. 2005.*A Brief History of Neoliberalism*. Oxford and New York: Oxford University Press.（＝二〇〇七、渡辺治監訳、『新自由主義—その歴史的展開と現在』作品社。）

Hall, Peter.1998. *Cities in Civilization*. Pantheon.

Hulchanski, J. David. 2010. *The Three Cities within Toronto: Income Polarization Among Toronto's Neighborhoods.1970-2005*. Neighborhood Change Research Group. Cities Centre.University of Toronto.

Invest Toronto(http://www.investtoronto.ca/Index.aspx).（取得日時：二〇一三年九月一一日）

Jacobs, Jane. 1961.*The Death and Life of Great American Cities*. Random house. New York.（＝二〇一〇、山形浩生訳、『〔新版〕アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会。）

Landry, Charles. and Bianchini' Franco. 1995. *The Creative City*. Demos.

——.2000. *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*. Bounces Green: Comedia.（＝二〇〇三、後藤和子監訳、『創造的都市』日本評論社。）

Markusen, Ann. 2006. "Urban Development and the Politics of a Creative Class: Evidence from the Study of Artists". *Environment and Planning A. Vol.38. No.10: pp.1921-1940.*

Martin Prosperity Institute (http://martinprosperity.org/).（取得日時：二〇一三年五月二四日）

Martin Prosperity Institute. 2010. *The Geography of Toronto's service and what it means for the city of Toronto*. Martin Prosperity Institute.

——.2011. *From the Ground Up: Growing Toronto's Cultural Sector*. Martin Prosperity Institute.

Metropolitan Toronto Council. 1995. *There's no turning back a proposal for change: submission to the Greater Toronto Area Task Force*. Municipality of Metropolitan Toronto, Chief Administrator's Office.

Official website for the City of Toronto (http://www.toronto.ca/).（取得日時：二〇一三年九月一一日）

Peck, Jamie. 2005."Struggling with the Creative Class". *International Journal of Urban and Regional Research Volume 29.4 pp.740-770.*

Pratt, Andy C. 2008. "Creative Cities: the Cultural Industries and the Creative Class".*Geografiska Annaler: Series B -Human Geography. 90(2):pp.107-117.*

Price Water house Coopers. 2012. *Cities of Opportunity 2012*. Price Water house Coopers.

Rinner, Claus.; Dianne Patychuk.; Suzanne Briggs. 2011. *Final Project Report and Map Series*. Toronto Public Health.

佐々木雅幸、一九九七、『創造都市の経済学』勁草書房。

——、二〇〇一、『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』岩波書店。

笹島秀晃、二〇一二、「創造都市と新自由主義—デヴィッド・ハーヴェイの企業家主義的都市論からの批判的視座—」『社会学年報』四一：七九—八九、東北社会学会。

Sassen, Saskia.1991. *The Global City: New York. London and Tokyo*. New Jersey: Princeton University Press.（＝二〇〇八、伊豫谷登志翁監訳、『グローバル・シティ—ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房。）

Scott, Allan J. 2006. "Creative Cities: Conceptual Issues and Policy Questions" *Journal of Urban Affairs. 28: pp.1-17.* Statistics Canada (http://www.statcan.gc.ca/start-debut-eng.html).（取得日時：二〇一三年九月一一日）

Toronto Star (www.thestar.com).（取得日時：二〇一三年九月一一日）